

# 教育相談課だより

## ラグビー ワールドカップに学ぶ

アジア初開催となるラグビーワールドカップが、南アフリカの優勝をもって終了しました。ラグビーワールドカップは、オリンピック・パラリンピック競技大会やサッカーワールドカップと並んで3大国際スポーツ大会の一つとして世界中から大きな注目を集める大会です。日本代表は、前回大会で優勝候補の南アフリカを破る“ブライトンの奇跡”を成し遂げ、今大会でも初のベスト8に進出することができました。日本中がラグビーワールドカップでわき上がりましたが、教育相談的視点でこの大会を振り返ってみると、学ぶべきことも多かったように感じます。

### 1 ONE TEAM

ベスト8まで勝ち上がった日本チームは、実に半数近くが外国出身の多国籍集団でした。もともと島国に住む日本人は、多様性のあるチームで活動することが苦手とされ、多国籍集団の多様性のあるチーム構成では、日本人の良さが失われることが懸念されていました。そこで、このような状況では、チームのマネジメントが極めて重要な意味をもってきます。

多様性のある集団をうまくまとめ上げるための一つのヒントとして“目的合理性”が挙げられます。“目的合理性”とは、「一定の目的を達成するために効率よく組織された手段によって行動すること」です。ラグビーは、スポーツですから、やはり試合に勝つことが目的といえます。目的に向かって全員が合理的に行動するよう方向づけるのがリーダーの役割になります。ジェイミー・ジョセフHCは見事にその役割を果たしたのですが、一方でチーム内では対話や議論を重視し、選手だけのミーティングを増やしたそうです。これにより、選手の自主性とチームワークがみるみる高まっていったとのことでした。

これを学校教育に当てはめてみると、管理職のリーダーシップのもと、各々の教職員が教育プロとしての自覚をもち、目的に沿って自分で考え、行動することが大切ということになるでしょう。“チーム学校”と言われて久しいですが、もう一度その意味を考えさせられました。

### 2 コーチング

前回のイングランド大会での立役者はエディー・ジョーンズHCでしょう。勝つための準備を徹底し、選手たちに猛練習を課したことで知られています。このエディーHCはスパルタ教師タイプとして有名でした。一方、現日本代表のジェイミー・ジョセフHCは対照的と言われる。ジェイミーHCが求めたことは、選手一人一人が自らから判断し、行動する精神面の強さとも言える自主性だったとのこと。田中選手は、「エディーの時は『やらされている感』が強かったが、今は自分たちで考えながらやっている。」とインタビューに答えています。前回越えられなかった壁を、今大会で越えられた秘密はここにあるかもしれません。

指導者が、指導される人間の中にある答えや能力を引き出すための効果的な関わり方をコーチングと言います。指示的、指導的に関わるのではなく、一緒になって考え、自立させていくことが大切なのは、ラグビーだけのことではありません。学校生活において、教師が児童生徒と関わる際にも必要なスキルです。

教育相談課で行った研究の中に、「教師のためのソーシャルスキルトレーニング」があります。この研究の重要なスキルの一つにコーチングがありますので、ぜひご覧下さい。

(参照：研修センターWebページ「研究—研究報告書—平成23年度—教育相談に関する研究」)

